

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	田中 和夫
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
親鸞の念仏思想と見仏体験			
論文審査担当者			
主査	教授	町田 宗鳳	
審査委員	教授	安仁屋 宗正	
審査委員	教授	荒見 泰史	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、浄土真宗内において確固たる教義となっている「信心正因・称名報恩」説、つまり念仏は信仰獲得後の報恩感謝の表現であるとする考え方に対し、文献学のみならず、歴史学や図像学などの観点からの多角的な検証に基づいて異議を唱え、親鸞の念仏観を新視点から分析する大胆な思想的試みである。第一章「親鸞とその念仏の先行研究」では、江戸時代に「三業惑乱」事件が起きるまでは、念仏が信を起こすという自力的な「三業帰命」説が本願寺公認の教義であった事実を踏まえ、現行の教団組織内の念仏観が、史実とは乖離し、柔軟性を欠くものとして批判している。第二章「浄土教念仏の興隆」では、叡山延暦寺に三十年も滞在し、当時の行者に課せられていた常行三昧という修行も経験していたはずの親鸞の口称念仏が、明らかに天台宗の意識集中的な五会念仏の流れを汲むものであり、大脳生理学や現代心理学の知見も取り入れながら、彼の念仏実践には見仏という宗教体験が必然的に伴っていたはずであると指摘している。第三章「浄土教の念仏」では、親鸞が誰よりも強い影響を受けていた師の法然が「三昧発得」（念仏による見仏）を専修念仏の基軸にし、限られた弟子にしか許さなかった『選択本願念仏集』の書写を親鸞に許していることから、彼もまた念仏による見仏を支持する立場にあった可能性が高いと分析する。第四章「『行巻』引文に見る見仏表現」では、親鸞の主著『教行信証』に収められている「行巻」に注目し、中国浄土教以来の自力的な念仏称名による見仏を親鸞自身も体験し、それを教義の一部として含み入れていたと結論付けている。第五章「親鸞六字釈」では、親鸞の念仏観が凝縮されている「六字釈」を精査し、親鸞の仏身観においては、大日如来・阿弥陀仏・釈迦仏が三位一体視されており、念仏を釈迦仏の言葉そのものと捉えられていたとする新説を唱えている。筆者のこの言説は、仏教学研究の専門家にも注目され、学術誌『東アジア仏教研究』にも掲載されるに至っている。第六章「親鸞の念仏思想」では、平安末期から鎌倉時代にかけて日本仏教の主流であった「顕密一致」の思想的影響を親鸞も受け、空海の『声字実相義』にある「法身説法」という思想の延長線上に、念仏信仰が据えられていたことを実証的に分析している。顕教の範疇にある親鸞の念仏信仰が密教による思想的影響を受けていたという議論は斬新なものであり、日本仏教史研究において重要な意味をもつ。最終的には、親鸞もまた未信の者が信を得るための自力的な念仏を積極的に説いており、浄土真宗の「信心正因・称名報恩」説は親鸞による念仏観をどこまでも絶対他力的なものとする一面的解釈に過ぎないという結論に至っている。議論が浄土教学の枠内に留まらないように多分野の研究資料も引用しながら推論する学際的アプローチも、大いに評価できる。以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。</p>			